

令和7年度 徳島県小学校教育課程研究集会 外国語活動・外国語科部会

徳島県教育委員会 義務教育課
義務教育指導担当（外国語活動・外国語科）

1. 小学校外国語教育の充実に向けて

(1) 令和6年度を振り返って



1. (1) 令和6年度を振り返って

外国語教育の実施状況



小学校全
面実施

中学校全
面実施

高等学校
全面実施

2020 (R2)	2021 (R3)	2022 (R4)	2023 (R5)	2024 (R6)	2025 (R7)	2026 (R8)
中2	中3	高1	高2	高3		
中1	中2	中3	高1	高2	高3	
6年外国語科 (70H)	中1	中2	中3	高1	高2	高3
5年外国語科 (70H)	6年外国語科 (70H)	中1	中2	中3	高1	高2
4年外国語活動 (35H)	5年外国語科 (70H)	6年外国語科 (70H)	中1	中2	中3	高1
3年外国語活動 (35H)	4年外国語活動 (35H)	5年外国語科 (70H)	6年外国語科 (70H)	中1	中2	中3

全国学力・学習
状況調査

全国学力・学習状
況調査(CBT)

小学校学習指導要領実施状況調査

全国の小中学校に外国語(英語)の
デジタル教科書を導入

令和6年度を振り返って(成果)



- ◆ 単元終末で目指す子供の姿を明確にし、単元や時間のまとまりを見通して、単元指導計画を作成する教師が増えている
- ◆ コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを意識した言語活動を設定している
- ◆ 授業の中で、「言語面」や「内容面」について振り返る時間を大切にしている
- ◆ デジタル学習基盤を効果的に活用し、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させながら、学習者が主体となる授業改善が進んできている

令和6年度を振り返って(課題)



- ◆ コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを明確にした言語活動を設定しているが、子供が自分事として活動の目的を意識できていない



- ・題材が子供にとって興味・関心のあるものになっているか
- ・単元の導入時だけでなく、単元を通して、子供が活動の目的を意識できているか

- ◆ 単元で同じ言語活動を繰り返し、子供の変容が見られない



- ・段階的・継続的に言語活動が設定されているか
- ・言語面、内容面の指導において、教師の意図が一方的に優先されることなく、多くの子供の考えや意見を取り上げようとしているか

令和6年度を振り返って(課題)



- ◆ 音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりすることへの理解が不十分である

- ➡
 - ・小学校における「読むこと」「書くこと」の目標にあった指導がなされているか
 - ・中学校との接続が図られているか

- ◆ 「個別最適な学びと協働的な学び」という学習形態のみが強調されている

- ➡
 - ・「主体的・対話的で深い学び」を通じて資質・能力の育成を図るという基本的な視点の共有
 - ・全体に指導する場面、協働が必要な場面、個別に学習を進める場면을効果的に組み合わせて単元を設計しているか
 - ・デジタル学習基盤を活用することの目的が明確であるか

1. 小学校外国語教育の充実に向けて (2)「英語教育実施状況調査」より



1. (2)「英語教育実施状況調査」より

小中連携に関する取組の好事例（訪問及びヒアリングから）

情報交換

【小中で、教科書やパフォーマンス動画を相互に見合う研修会を実施】

- ・教科書を見合い、どのような言語活動やパフォーマンステストを行うかのアイデアを小・中で交換。
- ・小6と中1の学年末のパフォーマンス動画を見合い、「中1の1年間で何ができるようになるか」という姿を具体的に確認。接続期に必要な指導が明確となり、小中ギャップ解消が期待。

交流

【中学校英語教師が小学校で乗入れ授業を実施】

- ・乗入れ授業を実施した教師が、児童の習熟状況や小学校での指導内容について、中学校英語教師に共有。小学校での指導内容の理解と小中接続への意識向上に貢献。

【小・中学生が英語で一对一のオンライン交流、相互に学校紹介】

- ・相手に伝わるよう、伝え方や内容の工夫について指導。小・中学生ともに、相手意識を持ってコミュニケーションを図ろうとする姿が見られた。

小中連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定

【小中一貫したカリキュラムとCAN-DOリストを研修会で活用】

- ・小中一貫したCAN-DOリストに基づき授業計画を策定。相互に公開授業、授業研究会を実施し、CAN-DOリストを通じて各学校種の到達目標を確認。

【小中での段階的な「読むこと」「書くこと」の指導】

- ・小学校では絵本等を用いて「聞くこと」から「読むこと」、「読むこと」から「書くこと」を段階的に指導。中学校でも音声・動画付きの多読を通して「聞くこと」「読むこと」から理解したことについて相手意識を持って「書くこと」を指導。

小中連携が進んでいる学校の言語活動の特徴

【言語活動を通じた指導】

- ・子供が進んでコミュニケーションを図りたいと思うような、興味・関心のあるテーマを設定。教師との自然なやり取りの継続から、子供の英語による発話を巧みに引き出していた。発話の様子を踏まえた語彙・表現の指導を行い、使える英語の習得を促進。

【教師とALTのチーム・ティーチング】

- ・子供一人一人のつまづきを把握した上で、個別に誤りの訂正と、全体へのフィードバックを行う。常に子供を励まし、子供が自信を持って英語を使用できる環境を作り出していた。

※「情報交換」「交流」「小中連携したカリキュラムや学習到達目標などの設定」は、市区町村教育委員会が主導して実施。「小中連携が進んでいる学校の言語活動の特徴」は、各学校が実施。

※ R5全国学力・学習状況調査（中学校英語）の結果やR5英語教育実施状況調査の結果から、特色ある取組を行っていると思われる中学校14校、主にその学区内の小学校11校及び7つの教育委員会を訪問し、授業参観とヒアリング調査を実施。

英語教育実施状況調査等について、横浜国立大学 斎田聖研究室に委託して専門的な分析を実施。

1. (2) 「英語教育実施状況調査」より



ICT活用やALTが生徒の英語力に与える効果

- ICTの活用、ALTの参画に関わるほぼすべての活動で効果が見られたが、特にALTの授業内での活動（例：ALTが生徒の発言にフィードバックする活動等）やICTでの遠隔地とのやり取りは、生徒の英語力に効果
- 生徒がICTを通じて実際に英語を使う機会を設けることや、ALTが生徒の発言にフィードバックすることが、指導上も重要

【グラフの見方】

例えば、ALTによる「生徒の発言や作文等に対するコメント・フィードバック」の実施状況が一段階高い学校は
（例：「50～75%の授業」→「75%以上の授業」）、CEFR A1以上割合が1.18%高い

- 4: 75%以上の授業で実施
3: 50～70%の授業で実施
2: 25～50%の授業で実施
1: 25%未満の授業で実施
0: 実施していない

生徒の発言や作文等に対するコメント・フィードバック

やり取り・発表のモデル提示

パフォーマンステスト等の補助

生徒のやり取りの相手

発音のモデル・発音指導

電子メールやSNS、チャットでやり取り

発話や発音などの録音・録画

1人1台端末を用いて発表や話すことにおけるやり取り

学習者用デジタル教科書を活用

デジタルドリルや動画のコンテンツを活用

1人1台端末を活用

1.18 %高い

0.99 %高い

0.76 %高い

0.66 %高い

0.56 %高い

1.24 %高い

0.76 %高い

0.75 %高い

0.64 %高い

0.57 %高い

0.52 %高い

ALT
(授業内)

ICT
(授業内)

枠間では数値の大きさの比較はできない

【グラフの見方】

例えば、ICTを用いた「遠隔地の生徒等と英語で話す活動」の実施状況が一段階高い学校は
（例：「半年に1回以上」→「月1回以上」）、CEFR A1以上割合が1.34%高い

- 4: 週1回以上
3: 月1回以上
2: 半年に1回以上
1: 年1回以上
0: 実施していない

一定の目的を持った授業外での教育活動

英語の授業以外の授業や学校行事での生徒との交流

遠隔地の英語に堪能な人との個別会話

遠隔地の生徒等と英語で話す活動

遠隔地の教師やALT等とチーム・ティーチング

0.92 %高い

0.52 %高い

2.21 %高い

1.34 %高い

1.04 %高い

ALT
(授業外)

ICT
(遠隔地)

※ R5英語教育実施状況調査とR5全国学力・学習状況調査を活用し、ICT・ALTの活用等がCEFR A1レベル相当以上を達成した中学生の割合の向上に与える効果を分析。具体的には、R5全国学力・学習状況調査の英語に関する項目のうち、CEFR A1以上割合の予測に有効であった5つの要素：正答率・英語（聞く、読む、書く）、正答率・英語（話す）、生徒・英語への関心等4項目（生徒質問紙59～62）平均、生徒・英語活動7項目（生徒質問紙66～72）平均、学校・英語活動7項目（学校質問紙59～65）平均を統制変数とした上で、R5英語教育実施状況調査における各項目を独立変数に投入する階層的重回帰分析を用いて検討（正答率は第3学年4月の状況、その他は第2学年までの学習・指導状況）。

※ 数値（非標準化係数）が大きいほど生徒の英語力に与える影響が大きい。正れた活動の取組状況への効果が一段階高い学校は、CEFR A1割合がその数値分高いことを意味する。上記はすべて5%水準で有意。

※ なお、キーボード入力等で書く活動の数値は0.25であった。

※ 各枠内は回答単位が同一のため比較可能だが、枠間では比較はできない。

※ 学校単位（中学校第3学年の生徒数21名以上）で分析。

1.(2)「英語教育実施状況調査」より

【令和5年度 英語教育実施状況調査(小学校)調査結果より】

以下の活動にALT等が参画した学校・学科の割合	小学校
児童生徒のやり取りの相手	97.6%
教師とのやり取りを児童生徒に示すやり取り・発表のモデル提示	97.5%
発音のモデル・発音指導	97.5%
児童生徒の発言や作文等に対するコメント・フィードバック	89.2%
パフォーマンステスト等の補助	75.1%
英語の授業以外の授業や学校行事での児童生徒との交流	56.6%
一定の目的を持った授業外での教育活動（例：部活動、希望する児童生徒に対する個別指導、異文化理解のための学習）	33.3%

1. (2) 「英語教育実施状況調査」より

教育ICT利活用の目的9類型

1. 興味喚起

学習内容に興味を持ってない児童生徒に対して、興味を持ってもらう
多様なコンテンツの活用/日常風景と授業の接続

2. モチベーション喚起

外部からモチベーションを与えることで、学習意欲を高める
ゲーミフィケーション/誰と学ぶかの環境づくり/先生からのフィードバック

3. 理解促進

現行授業で説明しにくく、わかりにくい部分の理解を深める
二次元の紙ではできなかった説明/動かない図ではわかりにくかった説明/自分で見
たいように見られる教材

4. 授業効率化

課題提示/課題提出・課題回収・自動採点/効率化してできた時間ですべきこと

5. 進捗確認 ・理解度確認

一人ひとりに適した学習を提供する/結果だけでなく過程も見られる/先生の授業
の見とりをサポートする

6. 教材拡充

いままで使えなかった教材も使える/自分の学校に合った教材が使える/量的な制
限を解消/外部資料をリンクできる

7. 表現手段拡充 ・思考手段拡充

デジタルならではの表現や思考のオプションを増やす
表現手段としての活用/思考手段としての活用

8. 情報共有手段の拡充

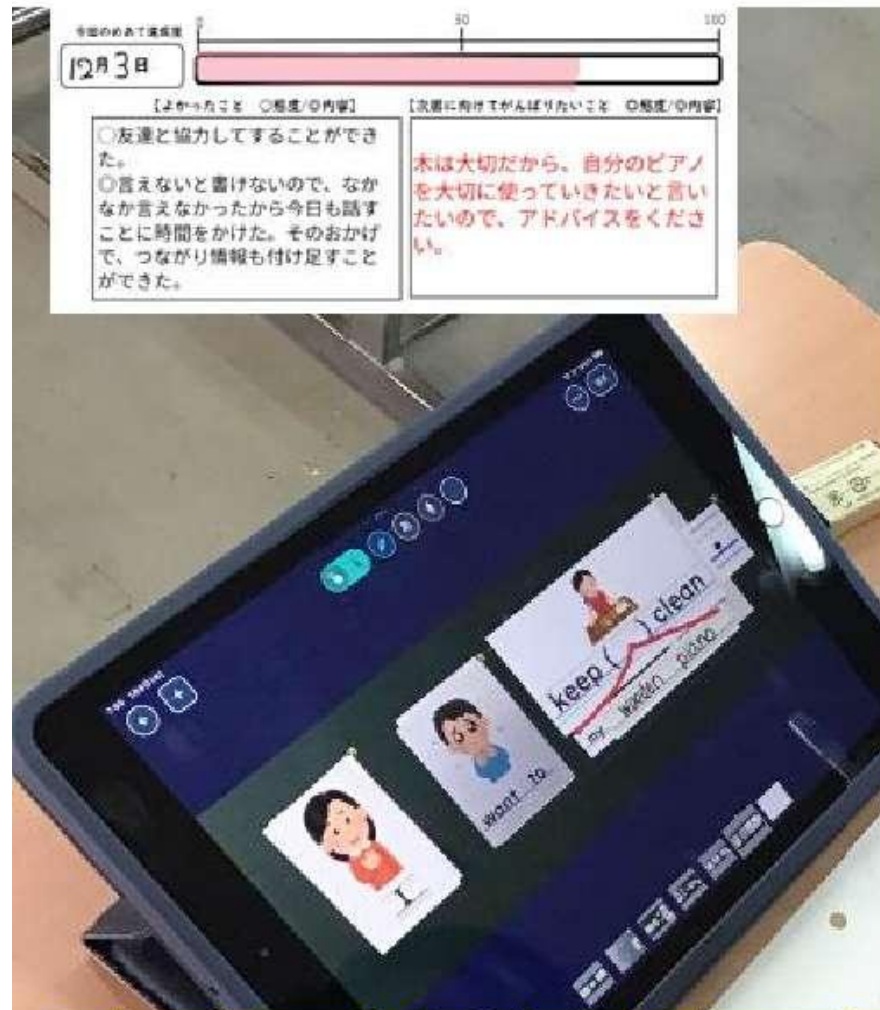
思考の共有、教材の共有、事務連絡など情報のやりとりを増やす
時間と場所の制約がなくなる 授業で/家庭との連絡に/職員室での情報共有

9. 学習環境の拡充

教室外で学習ができるようになり、学習時間を増やせる
時間の制限から解放/場の制限から解放/学校と外部をつなぐ

【出典】為田裕行『学校のデジタル化は何のため?』、同氏の講演資料（2022/12/20@文部科学省）をもとに作成

1. (2) 「英語教育実施状況調査」より



Koyama bats

Do you know koyama bats?

Koyama bats live on the mountain.

Forest loss is a big problem.

People cut down many trees.

I want to keep my wooden piano clean.

小学校第6学年
外国語

クラウドで共有された友達のアドバイスを参考にしながら、英語で伝えたい内容を整理する。

学習補助ツールを使うことで、語順を意識して文を書く。

17

【協力】宮崎市立西池小学校

1. (2) 「英語教育実施状況調査」より



- ① デジタル教科書で個別に自身の未定着の表現を練習する。
- ② その後に、友達と英語でやり取りをし、自分の内容を振り返る。
- ①②を繰り返すことで、伝えたい内容をブラッシュアップする。

21

【協力】板橋区立上板橋第四小学校

(出典) 令和7年度小学校及び中学校各教科等教担当指導主事連絡・研究協議会 配付資料

2. 主体的・対話的で深い学びの実現に
向けて
～学習の過程を大切にした
授業改善のポイント～



2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

学習の過程を大切にすることは



小学校学習指導要領(平成29年告示)第1章総則第3の1「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」の(1)

児童が各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した学習の充実を図ること。

学習の過程を大切にすることは



小学校学習指導要領(平成29年告示)

第2章 第10節 外国語

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

- (1)ア 単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、具体的な課題等を設定し、児童が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションの目的や場面、状況などを意識して活動を行い、英語の音声や語彙、表現などの知識を、五つの領域における実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ること。

学習の過程を大切にすることは



小学校学習指導要領（平成29年告示）

第4章 外国語活動

第3 指導計画の作成と内容の取扱い

- (1)ア 単元など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、具体的な課題等を設定し、児童が外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせながら、コミュニケーションの目的や場面、状況などを意識して活動を行い、英語の音声や語彙、表現などの知識を、三つの領域における実際のコミュニケーションにおいて活用する学習の充実を図ること。

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

学習の過程を大切にすることは



小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編 第3教育課程の実施と学習評価

小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編 第2章第2節 第3指導計画の作成と内容の取扱い

主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、例えば、主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、学びの深まりをつくりだすために、児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、といった観点で授業改善を進めることが重要となる。

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

小学校外国語活動・外国語の目標



	外国語活動	外国語
	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。	外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
知識及び技能	(1)外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする。	(1)外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。
思考力、判断力、表現力等	(2)身近で簡単な事柄について、外国語で聞いたり話したりして自分の考えや気持ちなどを伝え合う力の素地を養う。	(2)コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。
学びに向かう力、人間性等	(3)外国語を通して、言語やその背景にある文化に対する理解を深め、相手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。	(3)外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

外国語教育における「主体的・対話的で深い学び」



「主体的な学び」

- ・外国語を学んだり、外国語を用いてコミュニケーションを行ったりすることに興味や関心を持つ
- ・生涯にわたって、外国語によるコミュニケーションを通して社会・世界と関わり、学んだことを生かそうとすることを意識する
- ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを明確に設定したり理解したりして、見通しをもって粘り強く取り組む
- ・自らの学習やコミュニケーションを振り返り、次の学習につなげる

「小学校研修ガイドブック 理論編 2」を参照し、作成

「主体的な学び」の実現に向けた授業改善の視点

- ・子供が興味関心を持つことのできる題材を取り上げたり、身の回りのことから社会や世界との関わりを重視した題材を設定したりして学習への動機付けを図る
- ・単元の中で、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを明確に設定し、学習の見通しを立てたり、振り返ったりする場面を設ける

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

外国語教育における「主体的・対話的で深い学び」



「対話的な学び」

表面的なやり取りでのことではなく、他者を尊重して情報や考えなどを伝え合い、自らの考えを広げたり深めたりすること

「小学校研修ガイドブック 理論編 2」を参照し、作成



「対話的な学び」の実現に向けた授業改善の視点

- ・単元の中で、他者と自分の考えや気持ちなどを伝え合う言語活動を設定し、相手意識を持ちながら、互いの考えや気持ちを伝え合う
- ・他者の考えに触れて自らの考えを振り返ったり深めたりするように促すことが重要

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

外国語教育における「主体的・対話的で深い学び」



「深い学び」

- ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて思考力、判断力、表現力等を発揮する中で、言語の働きや役割に関する理解や外国語の音声、語彙・表現、文法※の知識がさらに深まり、それらの知識を聞くこと、読むこと、話すこと、書くことにおいて実際のコミュニケーションにおいて運用する技能がより確実なものになるようにし、（※小学校においては、文法指導は行わない）
- ・深い理解と確実な技能に支えられて、「見方・考え方」を働かせながら思考・判断・表現する力が活用されるようにする

「小学校研修ガイドブック 理論編 2」を参照し、作成

「深い学び」の実現に向けた授業改善の視点

- ・「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱が総合的に育成されているかに留意しながら、単元を計画する
- ・コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを明確にし、子供にとって必然性のある言語活動を積み重ねる
- ・デジタル学習基盤を子供の実態に応じて効果的に活用する

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善について

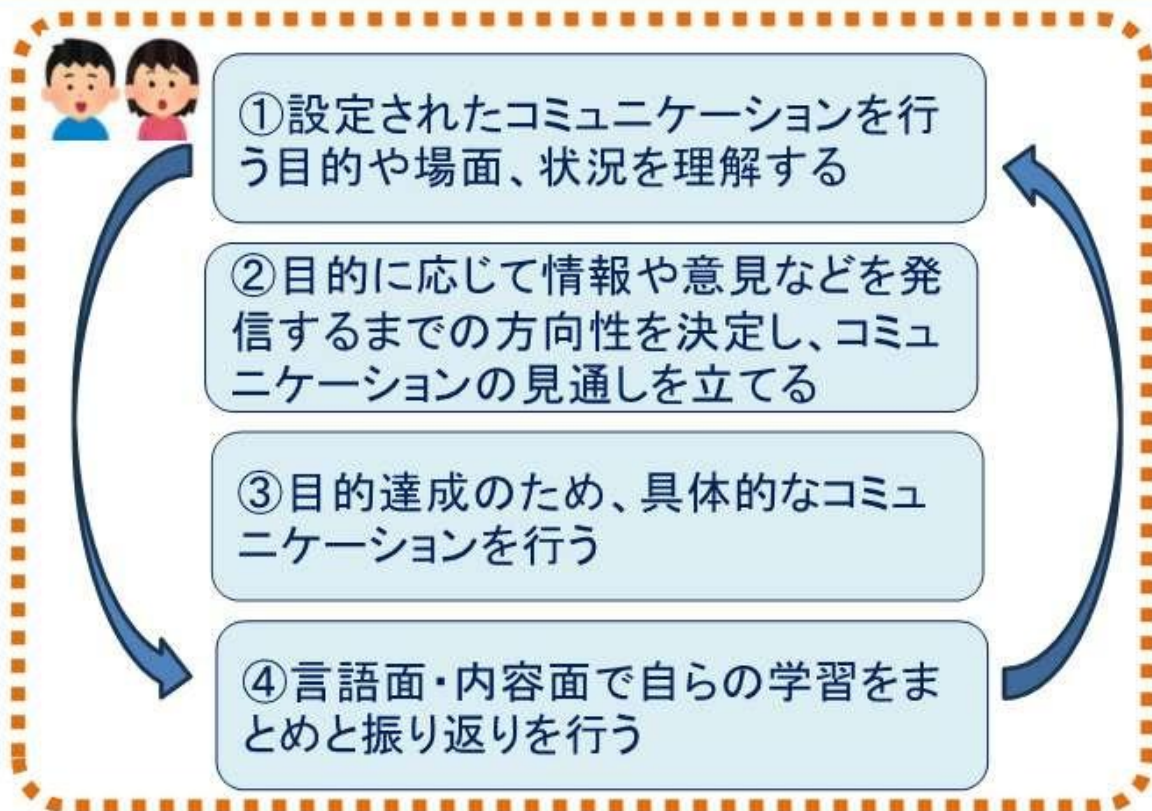


出典 主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について

(出典) 令和7年度小学校及び中学校各教科等教担当指導主事連絡・研究協議会 配付資料

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

外国語教育における学習過程



主体的な学び

対話的な学び

深い学び

学んだことの意味付けを行ったり、既得の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動で活用したりすることで、「思考力、判断力、表現力等」を高めていく



2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて



学習の過程を大切にした授業改善に向けて



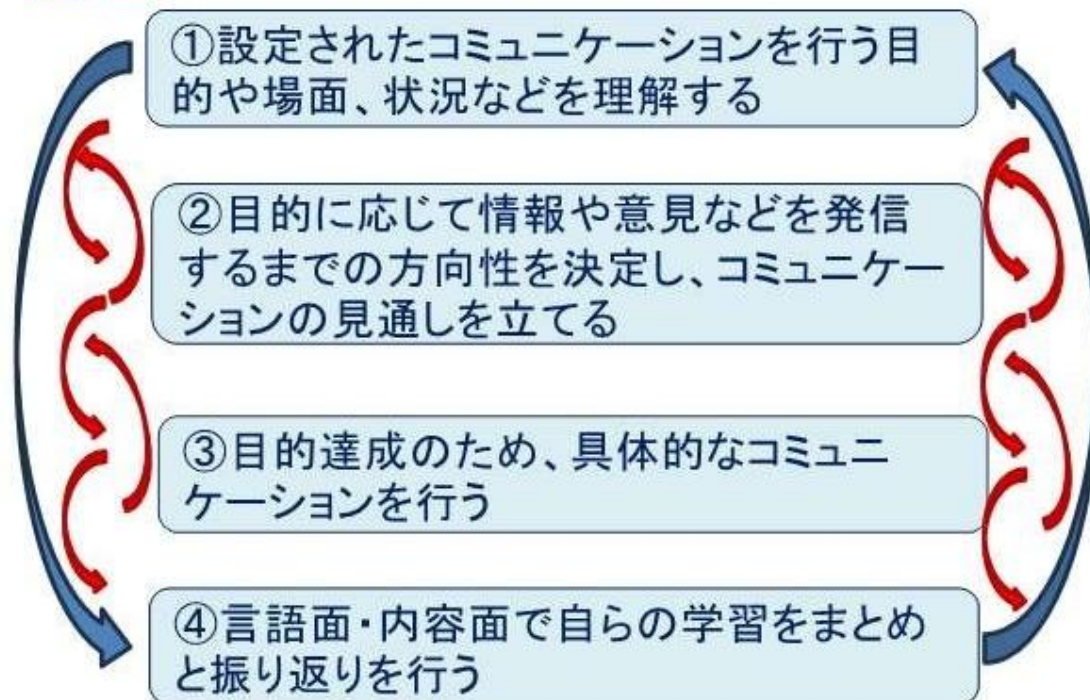
- ・学習過程は、必ずしも一方向の流れではなく、指導のねらいに応じて、戻ったり繰り返したりする場合がある。
- ・単元全体を通して「身に付けさせたい力」を育成する。
- ・話すこと[発表]が中心領域の単元においても、やり取りを大事にする。

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

★ 学習の過程を大切にした授業改善に向けて



学習過程は、必ずしも一方向の流れではなく、指導のねらいに応じて、戻ったり繰り返したりする場合がある。



例)

②から①につなげる

・【Small Talk】

単元のゴール達成に必要な語句や表現について思い出せるようにする

・【Let's watch】

目的や場面、状況などに応じた伝え方を確認する

①の過程においては、児童とやり取りをしながら、目的や場面、状況などの理解につなげる

③の過程においては、適時適切に児童を見取り、児童の実態から考えを広げたり深めたりできるように、効果的な中間交流(中間指導)につなげる→④へ

④の過程においては、誰に、何のために伝えるための学習をしているのか、常に①に立ち返ることが重要

③④を通して②にもう一度、立ち返る(教師や友達からのフィードバックの活用)

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

★ 学習の過程を大切にした授業改善に向けて



小学校学習指導要領 第2章第10節
3 指導計画の作成と内容の取扱い(2)力

各単元や各時間の指導に当たっては、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などを明確に設定し、言語活動を通して育成すべき資質・能力を明確に示すことにより、児童が学習の見通しを立てたり、振り返ったりすることができるようになること。

学習指導要領
(資質・能力)



児童の実態



どのような力を身に付けてほしいか

単元の構想
(資質・能力を育成するための授業のまとまりの構想)



どのような単元・課題・評価でやるか

教科用図書・教材



教科書やその他の教材をどう使うか

1コマの授業

単元の目標⇔1単位時間の目標

2. 主体的・対話的で深い学びの実現に向けて

★ 学習の過程を大切にした授業改善に向けて



小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編 第3教育課程の実施と学習評価

主体的・対話的で深い学びは、必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、

単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、

例えば、主体的に学習に取り組めるよう

学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして自身の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するか、

対話によって自分の考えなどを広げたり深めたりする場面をどこに設定するか、

学びの深まりをつくりだすために、児童が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるか、

といった観点で授業改善を進めることが重要となる。

ALTの参画

ICTの活用

※児童の実態に
応じて調整して
いく

・児童が自身の発表等について、内容や質の高まりを実感できるような場を意図的に設定するとともに、その過程でどのように確認や練習をしたかについても取り上げ、「学び方を学ぶ」機会にもしていく。

・単元を振り返る際には、自身の変容とともに、よりよい学び方についても自覚させ、学習過程を児童自身が意識できるようにする。

2. 主体的・対話的で深い学びの実現 に向けて

小学校外国語教育における現状と今年度の取組について

- ②各領域を関連付けながら、系統的な指導を行っているか。また、単元など内容や時間のまとまりの中で指導することを大切にしているか。

<My summer vacationの例>

単元終末の活動	自分のことをよく知ってもらうために、夏休みの思い出についてALTや友達に発表する。
---------	---

第1時	ALTの話を聞いて、単元の場面や状況を理解することができる。
第2時	夏休みの思い出について紹介する表現を聞き取ることができる。
第3時	夏休みの思い出について聞いたり、話したりすることができる。
第4時	夏休みの思い出について聞いたり、話したりすることができる。
第5時	夏休みの思い出について、具体的な情報を聞き取ったり、自分のことをよく知ってもらうために話したりすることができる。
第6時	相手のことを知るために、夏休みの思い出の話を聞いて、具体的な情報を聞き取ったり概要を捉えたりすることができる。また、ポスターを読んで意味が分かる。
第7時	友達に自分のことをよく知ってもらうために、夏休みの思い出について話すことができる。
第8時	ALTに自分のことをよく知ってもらうために、夏休みの思い出について話すことができる。

授業は、目標のもとに設定される。よって、「言語活動」も「言語活動を通しての指導」もすべて、目標につながる事が重要。

R5. 6月「小学校及び中学校各教科等担当指導主事連絡協議会」資料より